



佐賀大学正門と佐賀大学美術館

佐賀大学 × クレセント

地域と共創するメディアコンテンツ総合教育研究設備

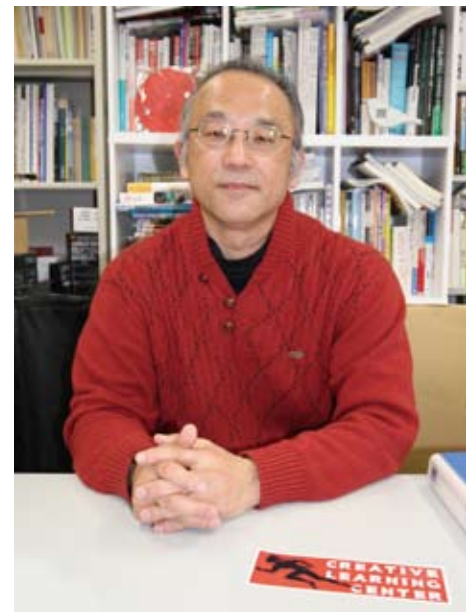
国立大学法人 佐賀大学は平成28年4月に『芸術地域デザイン学部』を新たにスタートさせた。これにともない、同学部と地域との共創によるメディアコンテンツ総合教育研究設備の整備がなされ、スタジオ・映像音響生成・実物生成・資料収蔵といった施設が整備され、平成29年度より各専門科目が運用される。クレセントからは同設備のスタジオにVICON、Faceware、データグローブ、HEWDDが納入された。同大学 芸術地域デザイン学部 中村隆敏教授(以下：中村教授)に設備整備の狙いや今後の方針について聞いた(以下カギカッコ内は同氏)。

■芸術地域デザイン学部について ■■■■

「佐賀大学では全学的にデジタル表現技術を学生に身につけさせるため『デジタル表現技術者養成プログラム』という特別の課程を8年ほどやってきましたが、開始当初は専門的な学部がありませんでした。昨年、芸術地域デザイン学部が新設され、より専門的な教育を行えるようになりました。この学部には地域デザインコースと芸術表現コースがあり、地域デザインコースのカリキュラムには地域コンテンツデザイン分野、キュレーション分野、フィールドデザイン分野の3分野があります。私は地域コンテンツデザイン分野

を担当しています。」

中村教授が担当する地域コンテンツデザイン分野では、映像デザイン、コンテンツデザイン、情報デザイン、メディアプレゼンテーション、メディアアートなどの専門科目を準備している。1年次は共通基礎科目としてグループワーク中心で絵画や彫刻、工芸、デザイン、マネジメントなどファインアートから芸術周辺分野まで幅広い領域をアクティブラーニング形式で学ぶ。3年次になると地域創生フィールドワークという、学外において自らプロジェクトを立案し地域の人たちと実践的な学びを行う科目がある。



佐賀大学 芸術地域デザイン学部 中村隆敏教授

「デジタルツールの最低限のスキルは当然として、地域に飛び出し実践的な関わりを持つことで、先端技術をいかに芸術表現に応用できるのか新しい発想を持ったアーティストや地域資産を基にした革新的なコンテンツデザイナー、ディレクターを育てたいですね。学生が横断的に造形力や発想力、マネジメント力を学べるのが本学部の強みです。」

■クレセントとの出会い ■■■■

中村教授とクレセントとの出会いはメディアコンテンツに関する様々な設備を整えなければならないことから、その構想にマッチしたツール



新スタジオ



Vicon Vero(モーションキャプチャカメラ)



CyberManus(データグローブ)



Vicon&Oculus MRシステム



バーチャルカメラ



HEWDD(広視野角HMD)

を模索しているときだった。

「環境の整備が必要だと思い、色々模索しているときにクレセントさんのスタジオにお邪魔する機会がありました。それから様々なところにお連れ頂いて、多くの情報を教えて頂きました。今後も設備を導入して終わりということではなく、最先端のテクノロジーの部分に関して連携させて頂きたいと思っています。私自身も大学という枠組みではありますが、なるべくオープンにしていきたいので、企業と大学が連携した人材育成を最近を進めています。単なるインターンシップではなく、地方から新しいコンテンツを創出し、新しい人材育成のあり方を生み出すというビジョンに共感していただくのはクリエイティブ系の業界さんが多いなと感じています。特にクレセントさんには熱心に協力して頂けるお話をご提案頂き、ありがたいですね。これからは地域でコンテンツを生み出していく優秀な人材と受け入れる企業が増えれば地産地消ならぬ、地産他消のコンテ



スタジオが整備される
クリエイティブ・ラーニングセンター(総合研究1号館)

ンツを作っていけるはずですよ。」

■クレセント製品について ■■■■

「私が有田焼のデジタルアーカイブをおこなっていた時の話です。「ろくろ」成形の手の動きは暗黙知も多いのですが、それらを多視点映像データとしてとらえることで、ある程度それで修行できるような補助的な教材を作りました。今回のデータグローブなどはピアノの鍵盤を叩く動きを捉えられるように非常に細かい部分までデータ化できますので、活用できるのではと思いました。

例えば、焼き物の場合は曲面に絵を描くのですが、とても高度な技術です。絵付けの職人がどういった筆圧か、速度か、そういった運筆もデータ化できると期待しています。」

■新スタジオについて ■■■■

地域資産を基にしたコンテンツデザインや表現方法の多様化におけるメディア芸術作品を制作する人材育成等、スタジオを活用した教育や研究の需要は高く地域からの期待も大きい。アート、デザイン、テクノロジーの融合領域と地域が持つ伝統や観光、文化資産をメディアコンテンツ化し、活用、発信していく新規性のある授業や研究開発を行っていくという。

「今回整備されるスタジオのレベルは全国でもあまりないでしょう。この施設設備を活用して積極的に学生が企業と繋がる教育プログラムを作りたいですね。学生も現状では卒業すると県外

に出ていく割合が多いのですが、地域企業や自治体とコラボレーションすることにより、東京や大阪でなくともやりたい仕事地元でもできるようになればと思っています。アジアにも近いですし、福岡と同様、佐賀にもコンテンツビジネスの可能性はあります。」

■今後について ■■■■

「現在、検討しているのは新スタジオに加えデジタルアプリケーションの設備を充実させ、ハードとソフトを兼ねたオープンスペースをベースに教員・研究者、学生、企業や市民が集まる場所です。そこでできたアイデアがプロトタイプとして生み出され、実際に課題解決や製品化を目指すなど共創デザインと芸術的創造力、マネジメント力による実践的な人材育成の基盤を作りたいと考えています。施設名称のクリエイティブ・ラーニングセンターはそのような意図があります。」

佐賀大学は、独自の美術館を設立し、旧来の文化教育学部美術・工芸課程の蓄積された実績及び総合大学としての強みを生かし、芸術で地域をデザインする特色ある教育・研究を推進するため、芸術地域デザイン学部を新設した。「有田焼や吉野ケ里遺跡等の歴史的・文化的遺産を多数有する佐賀県において、それらの資産を先進的なメディア芸術と先端的なコンテンツ開発として地域の新しい文化創造の啓発や新知識産業の普及に繋げていければと考えています。」

取材：立石伸雄 構成：菅崎英展(Video Journal)